



EL SALVADOR

学校名：宮代町立須賀小学校

氏名：柿沼 秀典

[担当教科：小学校全教科]

● 実践教科等：総合的な学習の時間、
道徳、社会

● 時間数：7時間

● 対象生徒：小学校6年生

● 対象人数：79人

1 単元名

ともに生きる ～われら地球人～

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- 国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てる。
(批判的に考える力・他者と協力する態度・進んで参加する態度)
- 多くの人々の助け合いや協力によって成り立っている日々の生活や、自分が生きていることに対して感謝する心情を養う。
(つながりを尊重する態度)
- 開発をめぐるさまざまな問題と自分達の生活とのつながりを理解する。
(多面的、総合的に考える力)
- 外国の人々や文化への理解を深める。
(コミュニケーションを行う力)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・世界には様々な文化があることに気づく【多様性】
- ・日本の食生活は、外国から多くの食料を輸入することで成り立っていることに気づく【相互性】
- ・富の所有や食料の分配に関して、世界の各国、地域間で格差があることに気づく【公平性】
- ・国際社会の平和と発展や環境の保全には、一人一人が国際社会の一員として、自分達にできることを実践していくことが大切であることに気づく【連携性・責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

世界には、貧困・飢餓、紛争・戦争、環境破壊、人権侵害といった問題がある。だが、島国である私達日本人にとって、それらは遠い世界で起きていることと感じている人も多いだろう。しかし、それらの問題は、日本の社会のあり方や私たちのライフスタイルとも深く関係している。

商業的な利益や経済的な効率ばかりを優先する社会のあり方は、弱い立場に追いやられる人々を生み、現在と未来の全ての命にとって大切な地球環境を破壊してきた。

文化・民族・宗教などを異にする世界の人々がともに生きることでできる公正な社会をつくっていくことが、これからの大きな課題である。そのために、私達ひとりひとりが、こうした問題を知り、自分の問題として考え、その解決に向けて行動していくことが必要である。

本単元において、教師の実体験をもとに外国への理解を深めるとともに、開発をめぐるさまざまな問題と自分達の生活とのつながりを知り、国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てていきたい。

(2)児童観

本学級では、普段、外国の方に会うのは外国語活動指導のALTだけという児童がほとんどであり、外国に精通している児童はいない。ただ、旅先などで外国の方を見たことがあるという児童は多い。現代において、日常生活の中で外国の方に会うことは珍しくない。将来、児童に外国の方と臆することなく接して欲しいと願い、朝の会などで外国のことを話題にしたこともあった。修学旅行先の箱根では、外国からも多くの観光客が来ていた。児童はすれ違ったときに話しかけようとしても始めは躊躇っていたが、一度声を掛けて気さくに接してもらえたことをきっかけに、知っている言葉でコミュニケー

ションをとろうとしている児童が多くいた。本単元において、エルサルバドルの文化に触れることで外国への理解を深めるとともに、自分達と違う文化を受容し、尊重しようとする心情を育てていきたい。

自分達と世界のつながりにおいて、5年生社会科「工業生産と貿易」の学習で、日本の輸出入の様子について統計資料を活用して調べ、主な輸出入品や輸出入相手先、その特色や変化を学習している。6年生の1学期には、総合的な学習の時間において環境問題を調べてきた。また、学習したことを生かして、キッズISO14000プログラム初級編に取り組み、約1ヶ月間家族でPDCAサイクルを行いながら、エコ活動に励んだ。プログラム終了後も、月に1回メーターチェックの日を設け、エコライフに取り組んでいる。そのため、どのような行動が地球環境に優しいか理解している児童が多く、意識をもってエコ活動を継続している児童もいる。本単元において、児童が開発をめぐる問題と自分達の生活との関わりを結びつけられるように授業を展開し、国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てていきたい。

(3) 指導観

第1時では、児童に外国への興味関心を湧かせるために、児童にとって身近である教師が外国に行ってきたという体験談をする。「エルサルバドルでどのような時間を過ごしたのか」を写真や映像で紹介していくことで、文化の多様性に気づくことができるようにする。

第2時では、日本とエルサルバドルの地理的特徴や文化を比較して、日本の特色を理解させる。そして、外国人に対して日本のことを説明できるように、日本を紹介する手紙を書く。

第3時では、とうもろこし粉を使用したエルサルバドル伝統食「ププサ」づくりを行う。児童のイメージする主食とは、米、パン、麺である。ププサを食べることを通して、とうもろこしを主食としている国も多く、とうもろこしが主食になり得るということを体験的に学ぶ。ここでの学びが、現実的な方法ではないが、日本をはじめとした先進国が家畜の餌にしている大量のとうもろこしを支援に回せば、世界の飢餓を終わらせることができるという認識へとつながると考える。

第4時では、世界の各国、地域の状況差を理解させるために、「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを行う。富の分配では、一人一枚ずつあるはずのバスケットを「富裕層、中間層、貧困層」の富に応じて分けていき、富の分配がどれだけ不平等であるかを実感できるようにする。世界の各国、地域間の格差を学ぶために、児童にとって身近である食料を題材にする。

第5時では、飢えと先進国のつながりを明らかにしていく。毎年、世界人口を養うことのできる穀物が生産されているのにも関わらず、先進国が飼料として大量に消費していることが一因で飢える人々が存在するという現実。また、さまざまな経済活動に起因する環境問題が食料不足に結びつくことも学習し、自分にできることは何かを考える際に選択肢を広げられるようにする。

第6時では、青年海外協力隊OBの方を講師に招き、「なぜ日本が支援をするのか」「途上国の人々の暮らし」を専門的な視点から講義していただく。さらに、「なぜ青年海外協力隊を志したのか」も講話していただき、児童の今後の生き方を考えさせたい。

第7時では、国際社会の一員（地球人）として、世界で起きている様々な問題の解決に向けて、自分達にできることを考える。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	① 開発をめぐる様々な問題について関心をもち、その解決に向け、自分にできることを実践しようとする。 ② 日々の生活や生きていることに感謝しようとする。 ③ 外国の文化に関心をもち、理解しようとする。	① ウェビング図で貧富の格差や環境問題の構造的なつながりを考えている。 ② 開発をめぐる様々な問題の解決に向け、自分達にできることを考えている。	① (フォトランゲージなど) 資料から、必要な情報を読み取ることができる。 ② 物事を関連付けていくために、ウェビング法を用いている。	① 世界には、様々な文化があることを知る。 ② 開発をめぐる様々な問題と自分達の生活とのつながりを理解する。
評価方法	児童の活動の様子 感想用紙	学習シート 感想用紙	学習シート	学習シート 感想用紙

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	エルサルバドルを知ろう	○世界には、いろんな文化があることを知る。	1 写真を通して、エルサルバドルがどんなところでどんな生活をしているのか知る。 2 フォトランゲージを行い、エルサルバドルと日本のつながりを知る。
2	日本を紹介しよう	○日本の特色を理解し、説明できるようにする。	1 エルサルバドルと日本の比較を通じて、日本の特色に気づく。 2 エルサルバドルに日本を紹介する手紙を書く。
3	エルサルバドル伝統食「ププサ」づくりに挑戦	○エルサルバドルの食文化に触れる。 ○第5時の学習につなげるため、とうもろこしが主食になることを知る。	1 とうもろこし粉を使用したエルサルバドル伝統食である「ププサ」をつくり、試食する。
4	世界がもし100人の村だったら	○世界には多様な言語があることを実感する。 ○世界の国々の大まかな位置関係をつかみ、各大陸の大きさや人口を概観する。 ○世界全体の富の分配がどれだけ不公平であるかを体験する。	1 世界の言葉で「こんにちは」 2 大陸ごとに分かれてみよう 3 世界の富はだれが持っているの？ 4 太りすぎな人、栄養の足りていない人、中間の人、今にも死にそうな人の割合 5 「世界がもし100人の村だったら」の読み聞かせ ※DEAR発行教材「世界がもし100人の村だったら」を使用
5	日本と世界とのつながり	○世界の飢餓状況は自分達の生活とつながりがあることを理解する。 ○地球人として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする心情を育てる。	1 日本はどんな食料を多く輸入し、どこの国から輸入しているのか理解する。 2 日本が多くの食料を輸入していることが地球環境にどのような影響を及ぼしているのか考える。
6	世界で活躍する日本人	○世界の様々な問題の解決に向けて、現地の人々とともに生きている日本人がいることを知る。 ○海外青年海外協力隊OBの生き方に触れ、今後の自分の生き方を考える。	青年海外協力隊OBの講話を聴く。 1 日本が支援を行う理由 2 現地の人々や生活の様子 3 青年海外協力隊に応募した動機
7	地球人としてわたし達にできること	○開発をめぐる問題を、国際社会の一員として共に解決していこうとする態度を育てる。	1 これまでの学習を振り返り、世界で起きている様々な問題の解決に向けて、自分達にできることを考える。 2 単元を通しての感想を書く。

7 授業事例の紹介

小単元名【 日本と世界とのつながり 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 12月10日(水)第5校時

(イ)実施会場 6年2組教室

(ウ)本時の目標

○世界の飢餓状況は、自分達の生活とつながりがあることを理解する。

○国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする態度を育てる。

(エ)指導のポイント

①世界とのつながりを考えさせるにあたって、児童にとって身近である食料をテーマにした。

②導入でどんな食料を多く輸入しているかをクイズにすることで、児童の興味関心を高める。

- ③「ハンガーマップ2013(国際連合世界食糧計画作成の写真)」を利用し、世界には飢餓で苦しんでいる人がいることを視覚でわかるようにした。
- ④第7時で自分にできることは何かを考える際に選択肢を広げられるように、日本が食料を多く輸入している現状が地球温暖化等の環境問題につながっており、食糧不足へと発展していくことを学習内容に取り入れた。児童には、やや難しい内容であるため、グループワークで自由に発言させながら、核心に迫るものは板書し、共通理解を図ったり詳しく説明したりして学習を進めていく。
- ⑤まとめでは、開発をめぐる問題を自分達の問題と認識させ、国際社会の一員として共に解決していこうとする態度を育てるために、東日本大震災時には先進国だけでなくカンボジアの地雷原の村など途上国からも義援金をいただいた話をする。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 10分	1 日本における食料輸入の現状	・「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」の中から輸入上位3品を考え、A3の白紙に記入する。 ・なぜ、とうもろこしが輸入額1位なのか考える。	グループ	○順位付けの理由が明確になるように、自分達の食生活やスーパーの売り場を思い起こさせて考えさせる。 ○ペットフードのとうもろこしを児童に見せ、とうもろこしを家畜の餌にしていることに気づけるようにする。	
展開 30分	2 世界の飢餓状況	・ハンガーマップ2013を見て、世界には飢餓で苦しんでいる人々がいることを知り、マップから飢餓の多い地域を読み取る。	グループ	○色が濃い部分はどこかを問いかけ、アジアやアフリカで飢餓が深刻であることに気づけるようにする。	
	3 餓えの仕組み	・世界には、世界人口全てを養える食料が生産されているにもかかわらず、なぜ飢える人がいるのか考える。	一斉	○生産された穀物の使い道を問いかけ、とうもろこし等を家畜の餌にしていること(自分達の食生活)が飢餓を生み出す一因になっていることを結び付けられるようにする。	
	4 日本は食料を主にどの国から輸入しているか	・「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」「大豆」のカードを、日本が多く輸入している国のマップの上にそれぞれ貼る。	一斉	○栄養が十分でない国からも輸入していることを確認する。	
	5 食物輸送による環境負荷	・飛行機や貨物船による輸送が、地球環境にどのような影響があるのか考える。	グループ	○主体的な学びとなるようにグループで行わせるが、意見があまり出ない状況であれば一斉指導に切り替える。 ○既習の地球の異変を思い起こさせ、二酸化炭素の排出がどのような問題へとつながっていくのかを考えられるようにする。	
	 グループワークの様子				
	6 地球温暖化と食料不	・5の学習活動で考えたことを発表する。	一斉	○5の学習活動で話し合った内容をもとに、	◆世界の飢餓状況は自分

	足の関係			地球温暖化⇒砂漠化 ・異常気象⇒食料不足までつながる過程を板書し、そのつながりを児童が視覚で理解できるようにする。 ○平成26年2月の大雪で、埼玉県も大きな被害を受けたことを紹介し、自分達の生活と結び付けられるようにする。 ○著書「世界がもし100人の村だったら」で掲載されていることを自分達の問題として認識させたい。	達の食生活と関わりがあることを理解できたか。 (学習シート・感想)
	授業の板書			○自分達の生活を犠牲にしても、日本を思いやる慈悲深さを感じ取らせたい。	◆国際社会の平和と発展や環境の保全に関心をもてたか。(感想)
まとめ 5分	7 共助について	・東日本大震災時、カンボジアの地雷原の村から届いた義援金のお話を聞く。 ・授業の感想を書く。	一斉		

(2) 授業の振り返り

【 ○良かった点 ▲改善点 】

- 飢餓は環境問題など様々なことが複雑に絡み合っていることを考えられる教材・学習展開であった。エコ活動に取り組む必要性を実感できた。
- 「世界には餓えて苦しんでいる人がいるのにも関わらず、先進国が家畜の餌として穀物を輸入していること」や「日本は栄養不足の人口の割合10%前後の国も含めた多くの国から食料を輸入していること」に対して、児童は、違和感を抱いたり、普段の生活に有難みを感じたりした。
- 東日本大震災時、自分達の生活を犠牲にしてまで支援をしてくれた人々がいたことを知り、困っている人を助けたいという気持ちが芽生えた児童もいる。
- ▲学習内容が多かったために、児童の思考の深まりが浅かった。活動ごとに児童の感想を聞き、全体に広げていくことで、議論が深まったと考えられる。本時は学習内容5で終了し、6以降は次時に回すべきであった。
- ▲学習活動が多岐にわたり、本時の目標「世界の飢餓状況は、自分達の生活とつながりがあることを理解する」を十分に達成することができなかった。感想用紙に本時のねらいとは違い、輸入に関することを書いている児童もいた。教師自身がねらいを明確にもち、まとめていく必要があった。小単元名も「餓えのしくみ」等の方が適切だったのかもしれない。
- ▲本時では飢餓をテーマにして、途上国と自分達のつながりを考えた。注意しなければいけないことは、授業で扱った内容は飢餓を生む一因に過ぎないこと。また、飢餓も様々な問題の1つに過ぎないこと。切り捨てた情報も多い。偏った情報を与えてしまったのではないかという不安が残る。

(3) 使用教材

グループワーク使用教材ハンガーマップを切り取り、日本が中心になるように配置転換して貼付。A1サイズに拡大。拡大したものに飛行機と貨物船のイラストを貼付。

ハンガーマップ2013
(国際連合世界食糧計画作成)
黒板掲示用は、ポスター印刷で拡大

乾燥とうもろこし
(ペットショップで購入)

黒板掲示用に「とうもろこし」「豚肉」「牛肉」「果物」「えび」「小麦」「大豆」のイラストカード

(4) 参考資料等

- ・『世界から飢餓を終わらせるための30の方法』
特定非営利活動法人ハンガー・フリー・ワールド編集、合同出版(2012年)
- ・『世界の半分が餓えるのはなぜ?—ジグレル教授がわが子に語る飢餓の真実』
ジャン・ジグレル著、合同出版(2003年)

- ・『ハンガーマップ2013(世界の飢餓状況)』 国際連合世界食糧計画HPよりダウンロード
- ・農林水産物輸出入概況2013年(平成25年)確定値 (農林水産省 国際部国際政策課)
- ・『毎日新聞』4月16日「<東日本大震災>カンボジア・地雷原の村から義援金とお守り」

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

【 児童の感想を一部抜粋 】

- ・日本がどれだけ裕福な暮らしをしているのかがわかった。食べ物が十分に食べられなかったり、電気、ガス、水道がなかったりする暮らしをしている人が世の中にはたくさんいるのだから、物を「あって当然」と思っはいけないのだと思った。これからの世の中が平等になるといいなあと思う。
- ・最初のうちは「なんか授業が増えたなあ」と軽い気持ちだったが、1時間、2時間とこの授業を受けてみて気持ちが変わった。貧困の国のことを詳しく知り、実際にいった人からも話を聞き、そこに暮らす子ども達が東日本大震災で被災した日本人のことを心配し励ましてくれたことを知り、他の国の人を想う気持ちを学んだ。貧困の国は他にもある。その国のために私達ができることはまずこの国を知ることだと思う。
- ・学習を通してたくさんことを学んだ。1つ目は、世界に餓えている人がいるのは先進国にも原因があること。2つ目は、自分が幸せだということ。3つ目に身近にできることがあるということ。国産の野菜を買う、マイバッグを持って行くなどのそんな簡単なことで地球を救えるならやっていく。
- ・世界には餓えている人がいることを知った。そして、それらの改善策を自分達でできることもわかった。これまで自分はあまり募金をしなかったが、「してみよう」という心が芽生えた。少しでもいいから世界で困っている人達を支援したい。
- ・今まで、「途上国に住んでいる人は貧しくてとってもかわいそうだ」「世界が平等にならないかな、でも自分にできることなど何1つないな」とばかり思っていた。でも青年海外協力隊OBの方や先生の話聞いて、「貧しいから不幸せなんかじゃない」「自分にも今できることがある」と思えることができた。私はこれからの人生、この学習のことを忘れずに生きていきたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【 単元を通して 】

- ・本学級39人中38人の児童が、単元の目標「国際社会の一員として、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献しようとする心情を育てる」を達成できたと感じられる感想を書いていた。全員達成できなかったことは残念であるが、3学期の社会科の学習の中で、青年海外協力隊のインタビュー等を紹介し、国際社会の一員としての自覚を芽生えさせていきたい。
- ・児童の感想より、児童の価値観を揺さぶることができたと感じている。当たり前だと思っていたことが世界的視野で見れば、決して当たり前でないことを知り、単元の目標であった「日々の生活に感謝しようとする心情を養う」ことのできた児童が多くいる。

【 教職員の反応 】

- ・「途上国の生活の様子を知りたい」「大人でもあまり知らないことに対して児童がどのような反応を示すのかに興味があった」等の理由から、授業を参観して下さった先生方がいた。国際理解教育は教科に明確に位置付けられていないので実践するには教師自身の努力が必要になってくる。だが、国際協力に興味のある先生が意外と多いことを知った。長期休業中の校内研修で、本単元で使用した教材等を児童役になって体験していただき、手法を伝達していけば、国際理解教育が広まっていくであろうという手応えを得ることができた。

10 教師海外研修に参加して

8の児童の感想等から世界の様々な問題について学ぶことは、豊かな心の育成において大変意義のあることだと考えている。だが、今回は単元を複数の教科で構成することで授業時数を確保したが、単一教科や教科外で実施しようすると授業時数の確保が困難な場合がある。教務主任や各教科主任と連携して、教育課程の中に位置づけていくことが必要である。

研修に参加して得た1番は人脈である。これまで学校で国際理解教育を行うことや話題にすることに抵抗があった。悩みを共有できる仲間ができたことは一生の財産である。また、国際理解教育は教員になる前から実践したいとずっと思ってきたことであり、今回の実践で手応えを得ることができた。今後も本実践の反省を生かして、ともに生きることでできる公正な地球社会づくりに参加するための教育を行っていく。そして、世界中の人々が笑顔で暮らせる世の中を、将来を担う子ども達とともに考え、

行動し、創っていく覚悟である。